

小池聖一著

『森戸辰男』



紹介者：長島 祐基

本書は戦前に東京帝国大学や大原社会問題研究所で研究者として活躍し、戦後には文部大臣や広島大学学長を務めた森戸辰男（1888～1984）の生涯を描いたものである。本書では森戸の生涯を10章に分けて述べている。各章毎に、誕生から苦学を経て東京帝国大学卒業に至るまで（1章）、東京帝国大学での研究から森戸事件での辞職まで（2章）、大原社会問題研究所での活躍（3章）、労働者教育活動（4章）、戦時下の活動（5章）、戦後の政治家への転身（6章）、文部大臣としての活躍（7章）、広島大学学長時代の活躍（8章）、中央教育審議会会長としての活躍（9章）、晩年の森戸辰男（10章）となっている。

本書は人物叢書と銘打っている通り、森戸に関する一定の学術的な知見を踏まえつつ、ある程度一般向けにも書かれている。まず、前提として本書の立場を述べておきたい。森戸の評価は戦前と戦後で大きく異なっている（6頁）。戦前には左翼運動とのかかわりから森戸事件で弾圧の対象となり、その際、「学問の自由」を掲げる学生や知識人達から支持された。逆に、戦後は文部大臣や中央教育審議会会長を務め、教育政策に深くかかわったこともあり、学生運

動や日教組から批判の対象となった（例えば207頁）。本書はそうした点を踏まえつつ、戦前と戦後の森戸の「常に変化する政治的位相」（288頁）ではなく、社会学者として学び続けた森戸の「思想の体系化」（6頁）を描くものである。以下では森戸の思想の体系化に沿って本書の記述を述べていきたい。

福山の没落士族の家に生まれた森戸は苦学を続けながら一高へと進学した。その過程でキリスト教の影響を受け（7頁）、新渡戸稲造の自発性を尊重する指導方法（10頁）や武士の教育者（14頁）としての人間性に傾倒した。東京帝国大学に進学（1910年）した森戸は「これからの時代に必要となる」（14頁）学問として、社会科学を学べる経済学科を選んだ。また、同時期に発生した徳富蘆花の演説をめぐる事件は森戸を含めた一高生に反骨精神を与えた（16～17頁）。なかでも帝国大学時代の森戸に大きな影響を与えたのが、統計学を用いた実証的な社会科学を教えた高野岩三郎の演習であった。森戸は高野を通じて労働問題に関心を持ち（19頁）、経済学部独立後は助教授として高野を支える（24頁）とともに、社会政策学を確立するために理論研究と実証研究の融合を目指した（25頁）。

しかし、高野と森戸が共に帝国大学で研究した時期は短かった。高野は国際労働会議代表事件（1919年）で、森戸もクロボトキンの論文邦訳に端を発した森戸事件（1919～1920年）で大学を去った。森戸事件では森戸が裁判で自説を曲げなかったこともあり、新聞紙上で同事件は「学問の自由」や「大学の自治」の問題として取り上げられ（44頁）、学生たちも森戸を支持した（38頁）。

帝国大学を免官となった森戸は高野が所長を務める大原社会問題研究所の研究員となり、ドイツへ留学した。森戸は留学中にプロレタリア

独裁と暴力革命論を掲げる共産党やスパルタクス団を武力鎮圧した右派社会民主党ではなく、その中間派である独立社会民主党に親近感を持った。森戸は左右の勢力を寄せる形での社会主義政党中央を理想とした(53頁)。また、ドイツで労働者教育・労働運動に関与したこともあり、森戸の研究は産業都市大阪を舞台とする実践的な方向に移っていった(55頁)。大阪労働学校を通じて社会科学の普及や労働者教育を進め(63頁)、「大学の顛落」という言葉で政治的な圧力に屈する大学を批判した(75頁)。また、中間派の全国大衆党を中心とする無産政党的左右合同を呼び掛け、合同によって結成された全国労農大衆党の大阪府支部連合会顧問となった(82頁)。

この時期の森戸は思想的には階級「国家」との対峙や社会主義社会のための社会変革という点から初期マルクスに共鳴した(57頁)ほか、キリスト教と社会主義の史的研究を進めた。それはキリスト教とマルクス主義双方の影響を受けた自らの思想の遍歴を追うものでもあった(92頁)。

ただし、森戸の教育実践や研究活動は日本が戦時体制に突入する中で困難に直面した。満州事変後に労働学校の生徒数は減少(97頁)し、大原社会問題研究所も創立者で活動を支援していた大原孫三郎が本業である倉敷紡績の業績不振や、研究所がマルクス主義研究機関化したことを嫌ったことで支援が打ち切られたという(99頁)。戦時色が強まる中でも森戸は産業報国運動批判(114頁)などの形で時局への発言をしていたが、1942年以降は検閲強化と紙統制の中で発言が難しくなった(116頁)。

戦後、森戸は都市の産業労働者を担い手とする民主化や経済の社会化、新しい国家像としての文化国家、平和主義国家を主張(121～122頁)するとともに、各種活動に参加した。社会

科学・社会政策の実践と労働者の生活向上に尽力した経験から社会党に入党し、政界に転身した(131頁)。政治家となった森戸は漸進的改革を目指したが、左派の力が強くなった当時の政治的状況下で彼の立ち位置は右派と目された(132頁)。森戸はドイツ留学以来の経験を活かし、左右両派をけん制しつつ、社会党独自の民主戦線(138頁)を提唱するとともに、憲法問題にあたっては社会的・経済的な基本権を規定する必要があるとして「生存権」を主張した(143頁)。

また、森戸は教育面でも活動した。新憲法に対応した教育の基本精神と基本法が必要であるとして教育刷新委員会(1946年設置)の委員を務めた(147頁)ほか、片山内閣と芦田内閣では文部大臣も務めた。森戸は文化国家・平和国家としての日本の再生の中心として教育を位置づけ、新渡戸教育を継承する形で教養人の育成を念頭に置いた。森戸には大阪労働学校の営為、教育機会の均衡・拡大をはかりたいとの思いも強かったと考えられる(162頁)。文部大臣となった森戸は新制教育制度の確立や教科書検定問題に取り組むと同時に、戦後に盛んになった学生運動や日本教職員組合の活動とも向き合った。森戸は学生自治運動が民主主義のモデルになることを期待した(177頁)。また、六・三制の完全実施と教育復興では日本教職員組合にも協力を期待したが、教育委員会制度をめぐる問題もあり、両者の関係は対立へと変わっていった(180～183頁)。一方で後年、森戸はイールズ闘争や安保闘争、全共闘運動といった学生運動を「逸脱した学生政治運動」(262頁)と捉えていた。こうした森戸の学生運動に対する態度は、全共闘運動後の臨時措置法の理論的根拠づけにもつながった。

森戸は社会党内閣崩壊後の1950年3月、代議士を辞任し、広島大学の学長に就任した。学

長時代の森戸は「一般教育」を担う教養部の重要性と、学生自身の積極的な共同としての学生運動の必要性をとらえる(199頁)とともに、国連の線に沿った現実的な平和主義(205頁)や原子力の平和利用(212頁)を主張した。また、1959年3月には労働科学研究所の第二代理事長に就任し、労働・産業・国家の協力を推進した(219頁)。森戸は、大学は「社会制度の一部(部分社会)」であり、「教育を通じて社会に貢献する組織であるべき」(222頁)と考えていた。

広島大学退官(1963年)後、森戸は大学問題だけでなく、戦後教育システム全般の見直しにかかわる活動を進めた(239頁)。1963年6月に中央教育審議会の会長に就任し、自由と責任を持った市民の育成に主眼を置く「期待される人間像」(242頁)を掲げて後期中等教育改革にも携わった。森戸は新渡戸教育と大阪労働学校での経験、教員の専門職制化という、自身の「人生にとっての教育のすべて」(269頁)を盛り込もうとした。ただし、森戸の目指した政策は政府や文部省との関係の中で必ずしも達成されなかった。

森戸は晩年、松下視聴覚教育財団や日本教育会の役員を務めたほか、核家族化の中での老人福祉や老人教育といった福祉国家論の研究も70歳を超えてから進め(281頁)、1984年に亡くなった。死去に際しては「学問的良心を堅持」(坂田道太)、「穏健な社会主義者」(大内力)、「一貫して教育、学術の自由を考えられ、貢献された」(永井道雄)(282～283頁)と評された。

本書から読み取れる森戸の思想のキーワード

としてはキリスト教との接点、一高での新渡戸の指導、マルクス主義の洗礼と社会科学の研究、ドイツ留学の経験と中間派の重視、労働者教育の経験と戦後の教育政策や大学教育が挙げられる。教養観や教育実践、政治的な立場は戦前戦後を貫く点であり、本書冒頭で掲げられている森戸の思想的な体系化や一貫性ということになる。他方、教育や政治面での思想的な体系化/社会的な実践が前面に出る中で、マルクス主義や社会科学の理論と実証、労働者との関係といった部分は戦後の記述の中では背景に退いている。

森戸の生きた時代は近代日本の教養主義文化研究や知識人研究(例えば竹内2001=2007, 2003)が研究対象としている時代と重なる時代である。これらの研究は森戸が批判されるに至った戦後の大学や学生の変化、森戸を含む近代知識人が受けた教養主義の内実を問うものである。本書はそうした社会状況の中で生きた知識人を、戦前戦後を貫く個人の思想的体系化という次元からとらえるものである。両者を合わせて読めば近代日本の学知や教養をめぐる問題をより深く理解出来るだろう。

(小池聖一著『森戸辰男』吉川弘文館、人物叢書310、2021年7月、344頁、定価2,640円(税込))

(ながしま・ゆうき 法政大学大原社会問題研究所 兼任研究員)

【参考文献】

- 竹内洋(2001=2007)『大学という病——東大紛擾と教授群像』中央公論新社
竹内洋(2003)『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社